

西村天囚『屈原賦説』にみる漢学の近代

Modernization of Sinology in NISHIMURA Tenshu's "Kutsugen Fusetzu" (Studies on the Writings of Qu Yuan)

はじめに——西村天囚研究の現状と本稿の意図

西村天囚（一八六五—一九二四）、名は時彦^{ときひこ}、天囚は号、また碩園とも号す。その活動の幅広さは、しばしば分野を越えた活躍を見せる明治人の中でも、群を抜く。『屑屋の籠』などの風刺小説、『大阪朝日新聞』の記者として発表した多数の評論や伝記、日清戦争後の湖広総督張之洞との会見、『日本宋学史』執筆と懷徳堂の再興、そして最晩年の宮内省御用掛就任。文芸、報道、政治、学術とさまざまな分野で多くの仕事をしたのみならず、それぞれの分野における業績がまた多様なのである。

その多面的な活躍にもかかわらず、いやそれがむしろ障害ともなつて、天囚に関する研究は十分とはいえない。その中で、漢学者としての面には、いくつかの角度から光が当てられてきている。まず町田三郎「天囚西村時彦覚書」^一は、天囚の著述に広く目を通してその生涯を描き出した一種の評伝である。その規模は先行する後醍醐院良正『西村天囚伝』^二よりずっと小さいが、学術面に焦点化しているのが特徴であり、町田による一連の日本漢学者研究の起点でもある。今世紀に入ると、大阪大学中国哲学研究室の湯浅邦弘らが、精力的に成果を発表する。それらは、大阪大学が懷徳堂の蔵書を継承したことから、おのずと天囚と懷徳堂との関わりに集中してきた^三。近年、天囚の故郷種子島に残された資料の調査が行われている^四。一方、陶徳民は、天囚とその師・重野成斎との関わりをふまえ、漢学の枠を越え、天囚の清

谷口 洋

TANIGUCHI, Hiroshi

- 一 町田三郎「天囚西村時彦覚書」、『明治の漢学者たち』研文出版、一九九八年所収。初出は『哲学年報』（九州大学）四二、一九八三年。
- 二 後醍醐院良正『西村天囚伝』、上下二巻、朝日新聞社社史編修室、一九六七年。
- 三 なお、湯浅の近著『世界は縮まれり——西村天囚「欧米遊覧記」を読む』（KADOAKAWA 二〇一三年）は、天囚の新聞記者としての活動を取り上げたもので、今後の新たな展開が期待される。

朝人士との関わりや、日中関係に関する発言を論じている五。

ところで、天囚が学術の面で力を尽くしたもう一つの対象に、中国古代の韻文である楚辞^六がある。天囚は、自らの書齋を「百騷書屋」と名づけ、楚辞に関する多くの資料を蒐集し、著述に励んだ。清末の大儒俞樾が揮毫した「読騷廬」の扁額を背にして座る天囚の写真は、よく知られている。「騷」とは、屈原のそして楚辞の代表作「離騷」に由来し、ひいては楚辞文学全般を指す。天囚の『楚辞』コレクションと関連の著作原稿は、没後懷徳堂の所蔵となり七、中国からの見学者もあつたという八。

近年、天囚の楚辞研究への言及はいくつかある。ただそれらは、楚辞研究の枠内にとどまっており、漢学者としての天囚に深くふれることがない。そのため、中国の古代文学研究者の間では、天囚はもっぱら『楚辞』の各種版本や注釈書の一大コレクターとして認知されているようなふしもある。他方、漢学者としての天囚に注目する者は、楚辞のように文学の領域に属する事柄に深く立ち入ることはない。

本稿でとりあげる天囚の『屈原賦説』については、つとに竹治貞夫がその著『楚辞研究』の「邦儒の楚辞研究」において、特に一節を割いて詳細に紹介し、「その規模の大きさと考証の精密さにおいて、楚辞の概説書として今なお最高の地位を占めるものと言つてよいであろう九」と評価する。しかし本書は、楚辞の概説書というにとどまらず、伝統的漢学とも近代的文学研究とも深く関わっており、漢文体で書かれたことをも含め、時代の転換点に生きた天囚という人の学問的営為を強く反映している。そのような見地からこの書をとらえ直すことを、本稿の目標としたい。

一、『屈原賦説』の「新しさ」——最初の楚辞概論

a. 『屈原賦説』の原稿と公刊

学者としての精力のかなりの部分を楚辞につき込んだ天囚ではあるが、楚辞に関するまとまった著作を生前に公にしたことはなく、ほとんどは原稿のままに残されることとなった。『屈原賦説』は、その中で唯一、部分的にはあるが刊行されたものである。まず『芸文』（京都文学会編）第十一年第六号から第九号（大正九年「一九二〇」六月—九月）までにわたって、「原漢文」との注記をつけて、書き下し文の形で十二篇が連載された。著者の没後、今度は手稿に基づいた漢文の形で、天囚の漢詩文集『碩園先生遺集^十』に収録された。『遺集』全五冊のうち、第五冊の全体がこれに

四 湯浅邦弘・竹田健二・佐伯薫「西村天囚関係資料調査報告——種子島西村家訪問記」、『懷徳』八六、二〇一八年、七八、九九頁。また翌年の懷徳八七には、湯浅（種子島西村天囚関係資料調査について）ほか数本の論考を掲載する。

五 陶徳民「日本における近代中国学の始まり——漢学の革新と同時代文化交渉」、関西大学出版部、二〇一七年。

六 「楚辞」という語には、文学の一ジャンルを指す用法と、屈原らの作品を集めて編まれた書物を指す用法とがある。本稿では明らかに書物を指す場合にのみカギ括弧つきの「楚辞」という表記を用いる。

七 その経緯は、湯浅・竹田・佐伯前掲文八四、八七頁に詳しい（当該部分は竹田の執筆）。

八 懷徳堂記念会『懷徳堂要覧』（一九四二年版）に、「同（引用者注：昭和十一年四月十四日北平清華

充てられている。

巻首の目録に続けて次のような識語があり、この著がもともと京都帝国大学における講義録であったことが知られる。大正九年五月の日付から、執筆後時間をおかずに雑誌に発表されたことがわかる。なお『芸文』では目録を省略したため、この識語は最終回の末尾に移され、文言の加除や日付の削除がなされた^{十一}が、『遺集』では稿本の旧に復されている。

以上十二篇。時彦在京都帝國大學。爲學生講述。遂綴成冊。夫屈原繼風雅於前。啓辭賦於後。爲文學之大宗。不可不讀。而古今註釋。亡慮百家。羣言紛淆。疑惑學者。愚因著論。畧述大旨。刊誤補義。待諸他日焉。大正九年五月西村時彦識^{十二}。

以上十二篇は、私時彦が京都帝国大学において、学生のために講述したものを、そのまま綴じて書物としたものである。そもそも屈原の作品は、前代の『詩経^{十三}』を受け継ぎ、後世の辞賦^{十四}を切り開いたもので、文学のおおもとであつて、必ず読まなければならない。ところが古今の注釈は、ほぼ百種にもものぼり、諸説紛々として、学ぶ者を戸惑わせる。私はそこで論を著して、大要を略述したのである。訂正や補足については、別の機会に譲る。大正九年五月西村時彦しるす。

ところがここにいう十二篇は実は上巻のみであり、下巻は未完の手稿のまま残された。『遺集』所収の『屈原賦説』には、末尾に編者の識語があり、下巻十篇の篇目を列挙するが、本文は収められない。原稿が残るのは前の八篇のみで「騷学」「注家」両篇を欠き、修正や書入の跡も甚だしく乱れが多いためである^{十五}。稿本^{十六}は懷徳堂を経て、その蔵書を引き継いだ大阪大学図書館にもたらされたが、『屈原賦説』の詳細な紹介と論評を行った竹治も、下巻の内容にはふれず、未刊に終わったことを惜しむばかりであった。

今世紀に入って、崔富章と石川三佐男が大阪大学において共同で調査を行い、下巻八篇の内容が初めて紹介された^{十七}。また前川正名も稿本によって、上下両巻にわたって内容を論述している^{十八}。その後、石川を代表とし筆者も参画した科研費プロジェクトにより、大阪大学の協力の下、『屈原賦説』を含む邦人の楚辞関連著作数点を撮影した。ついで矢田尚子を代表とした新たな科研費プロジェクトにおいて、それらの電子テキスト化を行った。『屈原賦説』下巻の稿本はたしかに多くの書入を含むが、文字は十分読解可能であり、朱筆の圈点によって句の切れ目も示されていた。そこで矢羽野隆男と前川が電子化を担当し、二〇一六年にウェブ上で公開された^{十九}。一方、稿本の写真は、研究協力者

大学劉文典君来堂、十日間碩園文庫の楚辞に付研究す」という(二八頁)。

九 竹治貞夫『楚辞研究』、風間書房、一九七八年、三七〇頁。

十 懷徳堂記念会、昭和十一年(一九三六)、線装五冊一帙。前三冊は碩園先生文集三卷、第四冊が碩園先生詩集三卷、第五冊が屈原賦説上巻である。

十一 ここに限らず、『芸文』所載の書き下し文は稿本の漢文とかなり異同があるが、いちいち指摘しない。

十二 以下『屈原賦説』の引用には、後述する黄靈庚、李鳳立の点校本(上海古籍出版社、二〇二〇年)のページ数を附す。当該箇所は四〇六頁。また『碩園先生遺集』第五『屈原賦説』(以下『遺集本』)とよぶ)では目録一b。なお本文は、稿本の写真や、矢羽野隆男・前川正名による電子テキスト(後述)をも参考にして改めた箇所がある。また、現代中国語の習慣によって附された点校本の句読点には従わず、稿本の朱筆に従

であった黄靈庚にも渡っていたが、こちらは二〇二〇年に至り、黄と李鳳立による標点を施され、「楚辞要籍集刊」の一冊として刊行された^{二十}。上巻が『芸文』に発表されてから、ちょうど百年後のことである。

b. 歴代楚辞研究の集大成

以下本書の内容を論じるに先立ち、全書の構成を見るためにその目録を掲げる。() 内は筆者による説明と仮の分類である。

上巻

- 名目第一 (楚辞の名義)
 - 篇数第二 (楚辞の篇数)
 - 篇数第三 (楚辞各篇の排列)
 - 篇数第四 (楚辞各篇の題義 以上、楚辞とその各篇の名称や排列)
 - 原賦第五 (賦の起源)
 - 体製第六 (賦と詩、賦と歌の関係)
 - 乱辞第七 (楚辞の篇末に付随する「乱」)
 - 句法第八 (楚辞の句の長短や構成)
 - 韻例第九 (楚辞の押韻)
 - 辞采第十 (楚辞の修辞 以上、文体と表現)
 - 風騷第十一 (詩経と楚辞の関連)
 - 道術第十二 (屈原の道徳と学問 以上、儒教との関連)
- 下巻
- 名字第一 (屈原の名と字)
 - 放流第二 (屈原の追放)
 - 自沈第三 (屈原の入水)
 - 生卒第四 (屈原の生卒年)

い句点のみを施した。

十三 『詩経』は屈原に先行する韻文で、儒家の五経の一つでもある。風・雅・頌の三部よりなる。

十四 辞賦(あるいは賦)は楚辞をその起源の一つとして発生した文体。楚辞を含めていうこともある。

十五 下巻先生立十篇、……属稿自名字至擬騷止、説述並非既説、而又繕寫刪潤之迹、駁雜不可次第。騷學・注家、僅乃擧目耳。故不收此集。『屈原賦説』遺集本四八 a・b。句読点は私に附した。点校本は稿本によるため、この識語は取めない。

十六 上巻の自筆稿本は二種ある。それぞれ表紙に「未定稿」「頌園手稿」と記され、ともに書入がかなりある。下巻の稿本は一種のみである。

十七 崔富章・石川三佐男『西村時彦对楚辞学的貢獻——兼述中国人心目中的屈原形象』(中国語)、『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』二五、二〇〇三

揚靈第五（後世の屈原伝説 以上、屈原研究）

騷伝第六（楚辞の伝承）

宋玉第七（後継者宋玉）

擬騷第八（楚辞の模倣的作品 以上、後世への影響）

騷学第九（楚辞の研究）

注家第十三（楚辞の注釈家 以上、研究と注釈）

篇名をすべて二字で統一するのは、古くは梁の劉勰の文学理論書『文心雕龍』の全編、近くは清の章学誠の学問論『文史通義』の前半四巻がそうであるように、中国の理論的著作に普遍的な型であった。漢文で書かれていることもあって、いかにも伝統中国の學術の型に則ったように見える。

ただ内容を見ると、今日の目から見ても、完備した楚辞概論とすることができる。注意すべきは、『屈原賦説』上巻が発表された一九二〇年には、中国でこういう書物はまだ出ていなかったということである。梁啓超の「屈原研究」^{三二}は一九二二年東南大学での講演に基づく短いものであり、謝無量の「楚詞新論」^{三三}は一九二三年の出版である。西村天因の『屈原賦説』こそは、世界最初の楚辞概論であった。

もちろん、その内容は多くの先賢の成果をふまえる。一例を挙げよう。前漢末の文献整理を反映する『漢書』芸文志に「屈原賦二十五篇」とあるが、それが現存するどの篇にあたるかについては古来議論が絶えない。天因は「篇数」篇においてこの問題を論じる際、まず漢代までの言及に含まれる問題点を確認する。後漢の王逸『楚辞章句』に附された各篇の序によれば、「離騷」・「九歌」・「天問」・「九章」・「遠遊」・「卜居」・「漁父」が屈原の作である。他に「大招」には屈原・景差の二説ある。また「九歌」は実際には十一篇ある。さらに問題なのは、司馬遷は『史記』屈原列伝贊で「余 離騷・天問・招魂・哀郢」^{三四}を読み、其の志を悲しむ」と言い、王逸が「招魂」を宋玉作とするのと齟齬がある。

こうして問題点を洗い出した後、天因は煩を厭わず、宋の晁補之・王应麟・葛立方・姚寬、明の黄文煥、清の林雲銘・錢澄之・蔣驥・王朋采・胡文英・屈復・王闈運・陳大文・李光地らの所説を引用し、最後に自らの判断を下す。「九歌」は本来「山鬼」までの九篇であり、のちに戦死者を祀る「国殇」が附加された。「礼魂」はもともと「国殇」の一部である。よって「九歌」は都合十篇となる。これに「九章」九篇・「離騷」・「天問」・「遠遊」・「卜居」・「漁父」各一篇を合わせると全部で二十四篇となり、あとの一篇は「大招」とするのがよい。清の孫志祖『説書胙録』によれば、司馬遷が「其

年、一〇一・一一二頁。この文章は、崔の秋田大学における講演原稿と、天因の楚辞研究についての論考とからなる。後半部分は、副題を省いて『浙江大学学報（人文社会科学版）』三三・五、二〇〇三年、三〇・三八頁にも掲載される。「屈原賦説」に関しては、上巻十二篇は竹治の紹介に譲り、下巻のうち本文の残る八篇の内容を紹介している。

十八 前川正名「西村天因の楚辞学」、『國學院雜誌』一〇六・一一、二〇〇五年、四四二・四五〇頁。

十九 URLは以下の通り。<http://isrla.coocan.jp/soji/kaiken02/kaiken2003.htm>

二十 西村時彦「楚辞纂説」・亀井昭陽「楚辞訣」と合わせて一冊とし、二〇〇二年七月に上海古籍出版社より出版された。

二一 騷学・注家両篇が篇目のみで本文を欠くことは、すでにふれた。

二二 当初「晨报」副刊に

の志を悲しむ」と言った「招魂」は、実は「大招」を指す。のちになって、宋玉の同類の作と区別するために「大」の字をかぶせたのである、と。

実は天囚の説は、必ずしも定説というわけではない。現行本に沿って、「九歌」は十一篇と数え、「大招」は数に入れない解釈も根強い。ただそうすると、司馬遷の言葉を解釈できない。天囚の論は、王逸までの伝承を矛盾なく解釈しようという配慮に出るのである。

このあと天囚は、明の陳繼儒・清の顧成天・近人の曾國藩・吳汝綸らによって提示された、屈原の作品に対する疑念を論じる。「漁父」や、「九章」の一部の篇は、主としてスタイルの相違から、屈原の作であることに疑問が持たれるようになってきた。しかし天囚は、確実な根拠がないことからそれらを退け、篇全体を次のように締めくくる。

孟子曰。盡信書則不如無書（盡心下二五）。屈子之文。必據漢志二十五篇之數而求之。恐未免拘泥。後人或疑偽託。或信疑參半。亦所不免。……

二十五篇之數。參舊說而論定焉。抑篇數多寡。似不關大旨。拘泥固非。妄斷亦不可。若不信書。則不如不讀書。學者折衷羣言。宜加慎焉爾^{二六}。

孟子は言った、「書物をすべて信じるなら、書物などない方がいい」（『孟子』尽心下）と。屈原の作品を、何が何でも『漢書』芸文志の二十五篇の數に拠って考えようとするのは、こだわり過ぎと言われてもしかたなからう。のちの人が仮託を疑ったり、半信半疑になるのも、また避けがたいことではある。……

二十五篇の數について、これまでの説を参照して論じ定めたが、そもそも楚辭の篇數がいくつあるかなど、核心にかかわることではないだろう。こだわるのはもちろんだめだが、勝手な決めつけもまたよろしくない。もし書物を信じないのなら、書物など読まぬがよい。学ぶ者はさまざまな説を折衷し、十分慎重であるべきだろう。

ここだけ読めば、これまでの考証は徒労だと感じるかも知れない。ただ、司馬遷と王逸の時点ですでに問題があったのだから、後から円満な解釈を下すのは容易なことではない。周到な考証を進めつつ、考証のための考証に陥らない柔軟さをこそ読み取るべきだろう^{二七}。

そのほかにも、「名目」篇では楚辭という名称、楚辭と辭賦との境界などの問題を論じ、「篇第」においては各注釈における篇の順序の違いを、「篇義」では各篇の題意を、「名字」・「放流」・「自沈」・「生卒」などの諸篇では屈原の伝記に

発表された。現在は、『飲冰室合集』文集第三九種に収められる。

二三 商務印書館より国文学小叢書の一冊として刊行。

二四 「九章」の一篇。

二五 原文は、引用の出典を割注で示すが、ここでは括弧に入れて示した。

二六 『屈原賦説』点校本四三五・四三六頁、遺集本七・八頁。

二七 釈清潭は、『楚辭』の解題においてこの問題にふれる際、異説については天囚の「屈原賦説」を参照するよう記している。なお清潭は「九歌」を九篇と数え、「招魂」・「大招」をも屈原作とする説を採り、天囚の結論とは異なる。「国訳漢文大成『楚辭』」(国民文庫刊行会、一九二三年)解題、七頁。

関する諸問題を取りあげている。これらはみな歴代の学者によってたえず論争が展開されてきた問題であり、楚辞各篇の注釈において言及されるのはもちろん、少なからぬ学者が、凡例や巻首などにおいて特にこれらを取りあげて論じてきた。天囚はそれらについて広く蒐集した上で、整理を施している。たとえば「篇第」篇には「楚辞篇第異同表」(漢宋・明清の二種)および「九章目次異同表」がつけられており、歴代注釈家の説の相違が一目瞭然である。「屈原賦説」は、歴代楚辞研究の集大成といえよう。

C. 新たな研究方向の開拓

『屈原賦説』の価値は旧説の集成と調停にとどまらない。いくつかの篇においては、新たな研究方向を開拓している。たとえば、上巻の最後に置かれた「道術」篇はもっぱら屈原の思想を論じ、特に『孟子』との関係を論証しようとしている。儒家で尊崇される堯・舜・禹・湯らの古代帝王を、屈原もまた尊崇していることを述べたあと、屈原の作品の中に『孟子』との関わりを探ってゆく。

離騷曰。紛吾既有此内美兮。又重之以修能。内美承上文正則靈均而言。……今合正則靈均稱内美。内言性也。美猶善也。

朱子云。是天賦美質於内^{二八}也。豈非祖述孟子性善之說者乎。則賦中有比。托名字而說人性。匪惟字謎也^{二九}。

「離騷」に「紛として吾 既に此の内美有り、又た之に重ぬるに修能を以てす」という。「内美」とは、その前の「正則」・「靈均」を承けていう^{三〇}。……ここで「正則」・「靈均」を合わせて「内美」といつているが、「内」とは性のことをいうのであり、「美」は善というのと同じである。朱子は「これは天が美質を内面に与えたのだ」という。これこそ孟子の性善の説を祖述するものではなからうか。つまり直叙の中に比喩があり、名と字に托して人の性を述べているのであって、ただの文字謎ではない。

曰法度。曰繩墨。曰祇敬。皆莫非修身之要。而遠遊所謂内惟省以端操兮。求正氣之所由者。得孔子内省不疚(顏淵)。曾子三省吾身(學而)之意。而與孟子養浩然之氣。其揆一也。屈子所謂正氣。即孟子所謂浩然之氣也(公孫丑上)^{三一}。

(屈原の作品に見える)「法度^{三二}」「繩墨^{三三}」「祇敬^{三四}」といった、どれも修身の要でないものはない。そして「遠遊」に「内に惟ひ省みて以て操を端しくし、正氣の由る所を求む」というのは、孔子の「内に省みて疚

二八 朱熹『楚辞集注』では「美質」の上に「我」の字がある。

二九 『屈原賦説』点校本 四八五・四八六頁 遺集本 四三 b・四四 b。

三〇 直前に「余に名づけて正則と曰ひ、余に字して靈均と曰ふ」とある。「離騷」は屈原の作とされ、ここで与えられる作中主人公の名と字は、そのまま屈原のものと考えられた。

三一 『屈原賦説』点校本 四八七・四八八頁、遺集本 四五 b・四六 a。

三二 「九章」惜往日に「先功を奉じて以て下を照らし、法度の嫌疑を明らかにす」。

三三 「離騷」に「繩墨に背きて以て曲を追ひ、周容を競ひて以て度と為す」「賢を挙げて能に授け、繩墨に循ひて頗らず」。

三四 「離騷」に「湯禹は儼にして祇しみ敬ひ、周は道を論じて差ふ莫し」。

しからず」(『論語』顔淵篇)、曾子の「三たび吾が身を省みる」(学而篇)の意を理解したものであり、孟子の「浩然の気を養ふ」というのと、根本にあるものは同じである。屈原のいう「正気」は、つまり孟子のいう「浩然の気」(公孫丑上篇)なのである。

かくして、「要するに屈原の学問は、孔子・曾子・子思・孟子^{三五}の道を貫き通して、とりわけ孟子と近い(要之屈子之學。貫通孔曾思孟之道。而尤與孟子近矣^{三六})」という結論を導く。天囚はさらに、屈原と孟子が同時代人であったことから、屈原が孟子の思想にふれた可能性を想定している。

屈原と儒家の關係は、天囚が初めて論じたわけではない。屈原の人格と思想は、古くから人々の討論と賛美の対象だったし、その中には儒家との関連を指摘した人々もいた。天囚も、明の汪瑗の『楚辞集解』から、「屈子は三百篇(『詩經』)を継ぎて婉^はづる色無かるべし、『孟子』七篇と並び伝えて多くは譲らざるなり」という評語を引いているし、そのほかにも清の李光地・陳澧・陳大文らの論に言及している。しかし、天囚の論はそれまでの断片的な批評とは全く異なり、一篇全体にわたる本格的な論である。天囚も指摘するように、明の黄文煥の『楚辞聽直』附録の「聽学」篇が先例としてあるにはある。しかし、ややもすれば思いつきや脱線に流れがちな黄文煥の議論と異なり、天囚はテキストに即して論じる姿勢を堅持している。屈原の作品を孟子の性善説や「浩然の気」に結びつける論旨にはやや強引さもあるが、作品に基づいて思想を考えるという近代的な研究に一步を進めたとはいえよう。

「原賦」以下の数篇は楚辞の文体を論じ、さまざまな角度からその表現上の特色を明らかにしている。その分析の緻密さと、挙例の豊富さとは、それまでの印象批評とは全く異なるものである。「辞采」篇から一例を挙げる。

屈子之文。匪惟其體制奇創。其造語措辭。亦多別創獨造自我作古者。如紛吾譽吾沛吾之紛字書字沛字。猶言紛然譽然沛然。雖與吾字連文。而實單用一字。如喟憑心而歷茲之喟字。悃鬱邑余佗僚兮之悃字。判獨離而不服之判字。亦皆以一字爲形容詞。是長于用一字者也。

曰正則。曰靈均。曰内美。曰修能。曰靈修(以上離騷)。曰靈保(東君)等。古之載籍。未有所見。屈子鑄辭奇特如此者。不可勝數。是其工于用二字者也。

曰紛總總。曰老冉冉。曰芳菲菲。曰悃鬱邑。曰佩繽紛。曰世溷濁。曰心絳結等。或疊字。或疊韻。皆以一字二字連綴成語。另關生面。是其精于用三字者也。

三五 曾子は曾參。「孝経」の著者とされる。子思は孔子の孫。「中庸」の著者とされる。

三六 『屈原賦説』点校本四八九頁、遺集本四七a。

三七 『屈原賦説』点校本四七三頁、遺集本三四a、b。

自此以往。無往不宜。或五字成句。或六字成句。變化百出。意態清新。讀者自知。不必摘出^{三七}。

屈原の文は、そのスタイルが独創的であるだけでなく、その造語や措辞にも、また独自のものを作り出し、前例にとられないところがある。たとえば「紛吾^{三八}」「謇吾^{三九}」「沛吾^{四十}」の「紛」「謇」「沛」といった字は、「紛然」「謇然」「沛然」というのと同じで、「吾」とつながってはいるが、実際には一字だけで使っているのである。「喟」^{四一}で心に憑ちて茲を歴^{四二}」の「喟」字、「怵」として鬱邑として余佗僚^{四三}す」の「怵」字、「判」として独り離れて服せず」の「判」字^{四四}も、みな一字で形容詞^{四二}としたものである。これらは屈原が一字を使うのに長じた例である。

「正則」「靈均」「内美」「修能」「靈修」（以上「離騷」）「靈保」（「九歌」東君）などは、古い書物に見えない語である。屈原の修辭はこのように独特で、その例は数え切れない。これは二字を使うのに巧みな例である。

「紛」として総総として「老いの冉冉として」「芳は菲菲として」「怵」として鬱邑として「佩は繽紛として」「世は溷濁して」「心は絪結して」など^{四三}は、字を重ねたり、ひびきの合う字^{四四}を用いたりして、みな一字と二字とでつながって語句をなし、新たな用法を切り開いている。これは三字を使うのに通じていた例である。

これ以上は、どこに行ってもすべてうまくいき、五字で句をなしたり、六字で句をなしたり、さまざまに変化して、内容も姿も清新であるのは、読んだ者にはおのずとわかるだろうから、例を挙げなくてもよからう。

さらに「宋玉」「擬騷」などの篇においては、それまでほとんど論じられないか、全く顧みられなかった問題を取りあげている。朱熹が「七諫」以下の漢人の作品を「無病の呻吟」と批判して以来、明清の注釈はおおむね、屈原の作と自らが考えるものだけを対象としてきた。漢代の作品のみならず、屈原の直接の後継者とされる宋玉の「九弁」でさえも、ほとんど取りあげられてこなかった。それを考えれば、天囚が本書に「宋玉」「擬騷」を設けて、これらを専門に論じたというのは、画期的なことである。とりわけ、「擬騷」篇はもっぱら漢代以降の楚辞体の作品を論じているが、これは天囚の当時であって前人未踏であったばかりか、二十世紀の楚辞研究全体を通じてもそう多くは見られない。次の一節は、これまで見過ごされていた漢代の模擬的作品の価値を述べたものとして、重要な意義を持つ。

予耽讀楚辭。群疑百出。因取楚辭十七卷。精讀畢業。而後知擬騷諸篇之必不可不一讀也。何以言之。以擬騷諸作是二十五篇註脚也。漢人讀騷之法。存于擬騷諸作之中。而屈子事蹟。往往有可徵者。其辭氣雖平緩。而其造語之鍊。結撰之工。亦皆可以爲法^{四五}。

三八 「離騷」に「紛吾既有此内美兮（紛として吾既に此の内美有り）、九歌」大司命に「紛吾乘兮玄雲（紛として吾 玄雲に乗る）」。

三九 「離騷」に「謇吾法夫前脩兮（謇として吾 夫の前脩に法る）」。

四十 「九歌」湘君に「沛吾乘兮桂舟（沛として吾 桂舟に乗る）」。

四一 以上の三例はみな「離騷」に見える。

四二 「喟」は「なげく」という動詞で訓読するが、ここでは嘆くさまを表す形容詞だというのである。後に出てくる「溷濁」「絪結」も、訓読ではサ変動詞だが、乱れ濁つたさま、心結ばれるさまを示す。

四三 天囚のいう「屈原賦二十五篇」の範囲では、「紛総総」は「離騷」二箇所と「九歌」大司命「老冉冉」は「離騷」と「九歌」大司命「芳菲菲」と「離騷」二箇所と「九歌」東皇太一「少司命」「怵鬱邑」は「離騷」「佩繽紛」は「離騷」と「九章」

私は楚辞を読みふけていて、疑問が次々わいてきた。そこで『楚辞』十七巻を手に取り、最後まで精読して、それから楚辞の模擬的諸作品も必ず一度は読まねばならないとわかった。なぜそう言うかといえば、模擬的作品は(屈原の)二十五篇の注釈であるからだ。漢代の人が屈原の作品をどう読んだかは、模擬的作品の中に残されている。そして屈原の事跡も、しばしばそこに証拠を見つけることができる。その語気は緊張を欠くが、その造語の錬成と、構成の巧妙さは、いずれも規範とできるものである。

ここでは模擬的作品の「注釈」としての意義が指摘されているが、下巻にはさらに「騷学」「注家」の二篇が構想されていた。もしこれらが公刊されれば、世界最初の楚辞研究史になったはずである。

二、『屈原賦説』の「新しさ」の由来——明治・大正期の学術的環境

a. 明治の文学史ブームとその視点

このように、西村天囚の『屈原賦説』は、漢文体という古めかしい外見にかかわらず、内容はむしろ斬新であったといえる。以下では、天囚が一九二〇年の段階でこのようなものを書き得た背景を探っていききたい。

まず、当時の日本の学界の新しい動きの中でもっとも目立つものとして、文学史の出現を挙げたい。文学の変遷を時代を追って見るという営みは、中国でも古くからあった。楚辞に関しても、つとに後漢の班固は、『漢書』芸文志詩賦略において、『詩経』から楚辞を経て漢の賦に至る歴史を述べる。そこにあるのは、周の『詩』の文化が失われて屈原を含む「賢人失志の賦」が興り、宋玉や漢の賦に至ると華美に走って批判精神を失ったという下降史観である。近代以前の文学史的言説は、このような儒教道徳的価値判断による現状批判か、創作者として特定の時代に規範を求め、そこから過去を裁断するものであった。

それに対し、近代的な歴史学の視点から中国文学の流れを論述するということは、日本をはじめ外国の方が先行した。一般には、明治三十年(一九八七)に出版された古城貞吉の『支那文学史』^{四六}が、中国文学史の嚆矢とされている。川合康三は、実際には日本やロシアでそれに先行する著作がいくつか出ていた^{四七}ことを指摘し、どれが一番早いかという議論にはさほど意味がないと断つた上で、次のように述べる。

思美人「世溷濁」は「離騷」二箇所と「九章」涉江・懷沙、および「卜居」、「心結」は「九章」哀郢・悲回風に見える。

四四 「量韻」とは本来、同じ韻部に属する二字、すなわち韻母(母音・尾音)と声調が共通のものをいう。ここに挙げられた例は、「鬱邑」「繽紛」「絳結」のように、声母(頭子音)が共通の「双声」とよばれる関係にある。

四五 『屈原賦説』点校本五四六頁。擬騷篇は下巻にあり、『遺集』には収められない。

四六 初版は経済雑誌社より出され、のち富山房を版元として版を重ねた。

四七 ロシアのワシリエフの『中国文学史概説』(一八八〇年)、末松謙澄の『支那古文学略史』(一八八二年)など。詳細は川合康三編『中国の文学史観』(創文社、二〇〇二年)所収の川合「今、なぜ文学史か」および同書資料篇「日本で刊行された中国文学史明治篇」を参照。

重要なのは、二十世紀を目前とした時期に至って、突如として中国文学史と題する書物が一斉に書かれ始めたことだ。それが文学史なるものの性質をよくあらわしている。すなわち、文学史という概念は西欧近代が生み出したものなのであった。十九世紀の西欧において近代歴史学が確立し、そこから派生して文化のなかのそれぞれの領域における通史が書かれるようになり、文学史もその一つとして生まれたのである。……

中国より身軽に西欧の近代文化の摂取を始めた明治期の日本において、西欧から伝来した文学史という概念と日本に古くから浸透していた漢学の蓄積とが結びつき、そこに中国文学史が誕生することになったのである。中国文学史という書物が日本でいち早く書かれたことは、決して偶然ではなかった^{四八}。

天囚の『屈原賦説』にも、こうした新時代の文学史概念ははつきりと反映している。本書に「宋玉」「擬騷」両篇があることは、その最も見やすい例であろう。そもそも楚辞の流伝・鑑賞・評論・注釈と研究は、みな屈原に対する尊崇の念と切り離せなかった。漢代における楚辞の模倣も屈原への尊崇に基づくし、朱熹がそれらを排斥し、明清に宋玉や漢人の作が顧みられなかったのも、屈原を尊崇すればこそである。天囚も屈原に対する尊崇の念はあるが、先に引いた『擬騷』篇の一段が示すように、同時に漢代の模倣的作品に対しても公平な見方をしている。

天囚も、模倣的作品の達成が屈原に遠く及ばないことは認めざるを得ない。彼は少年期の経験として、『楚辞集注』を讀破できず、自らの天分のなさを恥じていたところ、朱熹の『楚辞弁証』を讀んで、中国の学者も模倣作を含む『楚辞』十七巻を讀み通せないことを知って苦笑したと述べている^{四九}。しかし彼は、のちに研究者の目でこれらの作品を再読し、その文学史上の価値を發見したのである。こういう視点は清代以前の注釈には見当たらないものである。

さらに、楚辞の表現が模倣的作品を通じて後世に影響を与えた具体例をも挙げる。前漢の東方朔の「七諫」に「故人は疎くして日に忘れられ、新人は近くして愈好し（故人疏而日忘兮、新人近而愈好）」という句があるが、これは「九歌」の「悲しきは生別離より悲しきは莫く、樂しきは新たに相知るより樂しきは莫し（悲莫悲兮生別離、樂莫樂兮新相知）」に基づきつつ、「古詩」の「去る者は日に以て疎く、来る者は日に以て親し（去者日以疏、來者日以親^{五〇}）」に近づいてゆくのである^{五一}。

天囚の文学史的な視点は、模倣的作品にのみあてはまるのではない。「句法」篇では、楚辞に見える長短さまざまの句について検討した後、次のように総括する。「要するに、屈原の二十五篇の賦は、『古詩の流れ^{五二}』といわれるが、

四八 川合「今、なぜ文学史か」、前掲書四頁、および六・七頁。

四九 『屈原賦説』擬騷「予少時讀明鄒東郭續文章軌範。所錄屈子文三篇。惟喜卜居漁父。而不解離騷。尋讀楚辭集註。亦不卒業而中輟。況能及九辯以下擬騷諸篇乎。自顧竊愧天分之卑。及讀朱子辯證。而知彼士學者亦莫卒讀楚辭十七卷者。不覺苦笑。」（点校本五四六頁。ただし稿本の朱筆などが反映されていないため、矢羽野・前川の電子テキストに従った。）

五十 順に「七諫」自悲（今本は「愈」を「愈」に作る）、「九歌」少司命、「文選」卷二九「古詩十九首」第十四首。「古詩十九首」は後漢の詠み人知らずの作。

五一 『屈原賦説』点校本五四六頁。

五二 班固「兩都賦序」（『文選』卷一）に「或曰賦者古詩之流也」。

しかしその形式は、屈原によって創造され、後世の辞賦への扉を開いたのである（要之屈賦二十五篇、雖云古詩之流、然其體製。則創造于屈子。以啓後世辭賦之法門矣^{五三}）。また「辞采」篇では、「学者は屈原の賦を読まなければ、どうして『詩経』三百篇の変化がわかるだろうか、またどうして両漢以降の辞賦の源がわかるだろうか（学者不讀屈賦。則曷知詩三百之變。又曷知兩漢以後辭賦之淵源哉^{五四}）」ともいう。さらに「原賦」篇では、全篇にわたって賦という文体の起源と展開について論じている。『詩経』から楚辞を経て漢代の辞賦に至る系譜は、つとに『漢書』芸文志詩賦略において提示されたものであったが、それを価値判断を含んだ理念ではなく、作品に即して詳細かつ客観的に論じる姿勢は、それまでの楚辞関連の著作にはないものであった。天囚は楚辞を論じるに際し、漢代以降の辞賦の発展過程にも目を向けていたのである。天囚が屈原を「風雅を前に継ぎ、辞賦を後に啓く」「文学の大宗」と位置づけていた^{五五}のは、伝統的文学観の単なる継承ではなく、近代的文学史論としての本書全体を貫く綱領ということもできよう。

天囚は、「道術」篇では屈原と孟子の関係を論じていた。文学を論じる際に作者の思想を問題にするのも、当時の文学史において生まれた新しい型であった。錢鷗は、藤田豊八（一八六九—一九二九）の文学史^{五六}について、それが「思想内容」、「芸術形式」という二本立ての方法を取って記述されること、のちにしばしば用いられるこの手法が、当時においては新鮮なものであったことを指摘する^{五七}。

近代以前には、表現や形式を論じる際には、特に優れた（「氣に入った」といふべきか）箇所について、「妙」「奇」「絶」といった抽象的な評語を与えることが多かった。近世に流行した「評点」といわれる手法は、テキストの右側に傍点や圈点を打つことで注目すべき箇所を示し、行間や欄外に評語を書き入れるものであった。また詩に関する評論やエピソードを集めた「詩話」といわれる書物においても、詩の中から特定の句を取り出して、短い評語を加えるという形が多く見られる。そこでは、あくまで個別の句の巧拙が問題とされているのであり、それが作者の思想と結びつけられることはない。一方、作者の思想（「人品」といふべきか）が論じられる際は、もっぱらその人格の全体が問われるのであって、その人物の行動が粗上に載せられることはあっても、作品の表現と結びつけられることはない。藤田の文学史で「思想内容」と「表現形式」が二本立てになっているのは、一見すると二つのことをばらばらに論じているようだが、むしろそれまで別次元にあったものを同一平面に並列したのであり、それは両者に関連があると考えられたからである。藤田の書には「北方文学」「南方文学」という記述も見えるが、錢鷗はその地勢→国民性→思想→文学という方法が、当時の学界での有力な説であったことを指摘する^{五八}。『屈原賦説』には楚の風土を評論した篇こそないし、思想が表現の前提としてとらえられているわけではないが、表現を論じた諸篇と並べて「道術」篇がおかれ、『孟子』との関連が具体

五三 『屈原賦説』点校本
四六六頁、遺集本二九b、
三〇a。

五四 『屈原賦説』点校本
四七七頁、遺集本三七b、
三八a。

五五 『屈原賦説』卷首目
録の識語（前掲）。

五六 藤田豊八『支那文学
史』、東京専門学校蔵版。
刊年は記されないが、国
会図書館の目録では明治
二十八年（二八九五）から
三十年の間とする。錢によ
れば、東京専門学校講義録
の刊行年代と藤田の経歴と
から、このように推定でき
るといふ。

五七 川合編前掲書資料篇
「日本で刊行された中国文
学史 明治編」四十頁。

五八 同前。

的な表現に即して論じられているのは、まさに近代的文学史の方法論なのである。

b. 近代の学校制度と文学研究

これまで述べてきたような新潮流は、新しい教育制度を基礎としていた。新式教育と旧式教育の最大の違いは、確定したカリキュラムが存するか否かにある。文学史は、文学として教えられるべき内容を歴史の順序に沿って排列したものであり、それ自体がカリキュラムの一部をなすのみならず、カリキュラムの全体を可視化する意義をもっていた。和田英信は、明治期の中国文学史に中途で終わっているものがしばしばあることにふれ、その理由の一つとして、当時の文学史の多くが講義録として著されたため、実際の講義の状況が直接反映した^{五九}ことを挙げる^{六〇}。文学史は、近代的学校教育から生まれたのである。中国でも、梁啓超の『屈原研究』は大学での講演によるものであった。

文学史を書いたのも、新式の学校教育を受けた人々であった。比較的年長である末松謙澄（一八五五—一九二〇）は、明治十一年（一八七八）から十九年（一八八六）までイギリスに留学し、ケンブリッジ大学で学んだ。古城貞吉（一八六六—一九四九）は天囚よりわずか一歳年少だが、同心学舎・熊本高等中学卒業後、一高を中退している。高等中学校や高等学校は大学への予備教育を担っており、英・独・仏の語学習得に力を入れていた。中退とはいえ、古城が受けたのはこうした新式教育なのであり、むしろ漢学の方が独学だったのである。他にも、高瀬武次郎（一八六九—一九五〇）・藤田豊八（一八六九—一九二九）・笹川種郎（一八七〇—一九四九）・久保天随（一八七五—一九三四）らは天囚より数年年少だが、みな帝国大学卒業であり、しかも彼らの文学史は、大学を卒業して数年後の若いうちに書かれている^{六一}。ひとり児島献吉郎（一八六六—一九三二）のみは天囚と同じく古典講習科で学んだが、その文学史は、早期のものは春秋戦国で頓挫し、明治四十二年（一九〇九）の『支那大文学史古代篇』でも春秋戦国を「全盛時代」と称していたが、三年後の『支那文学史綱』では上古・中古・近古・近世のバランスの取れた叙述に落ち着く^{六二}。つまり、中国文学史というのは、はじめは西洋の学術にふれた若い世代によって書かれたのだが、彼らがそれによって切り開いた学術的環境は、新式教育を受けていない者にも、次第に新しい時代の新しい文学観を浸透させていったのである。

天囚の『屈原賦説』もまた、はじめにふれたように京都帝国大学の講義を基としていた。上巻の目録には大正九年（一九二〇）五月の日付があり、下巻稿本の題簽には「大正九年八月起稿」と記される。ところがこの年から、天囚は島津家臨時編輯所に招かれ毎月東京に通うようになり、翌十年には宮内省御用掛に任命されて上京することになる。『屈原賦説』下巻が完成をみなかったのは、おそらくそのためであろう。天囚はあとで述べるように東京大学古典講習所で

五九 たとえば藤田豊八の文学史が「東漢文学」で終わっているのは、末尾に「講者支那の事あり、遺憾ながらここにこの稿を中止す」とあるように、藤田が渡航して講義を継続できなくなったためである。

六〇 川合編前掲書資料篇六十頁。

六一 古城著は明治三十年（一八九七）、三二歳、笹川著は同三十一年（一九〇三）、二九歳。高瀬著と藤田著は刊行年不明だが、前者は三〇代、後者は二〇代での著述と考えられる。詳細は川合編前掲書資料篇のそれぞれの項を参照。

六二 幸福香織の調査によれば、児島献吉郎による文学史の最初の試みは、明治二十四年（一九〇一）から翌年にかけて、同文社『支那文学』に連載されたという。『支那大文学史古代篇』『支那文学史綱』はともに富山房より刊行。ちなみに『古代篇』の収録範囲は附までである。川合編前掲書資料

学んだが、新式の教育を受けたことはなかった。江戸時代に栄えた懷徳堂を再興して講義も行ったが、京都帝大での授業は非常勤で担当していたのであり、生涯を通じて新式学校の常勤職についたことはない。このように新式教育との関わりがごく限られたものであったにもかかわらず、天囚の著作には、当時の新しい学術の状況がはっきりと反映しているのである。

それにとどまらず、『屈原賦説』のある部分は、学界の潮流を先取りさえしている。「騷伝」篇は楚辞の流伝を述べ、「宋玉」篇は宋玉の作品を論じ、「擬騷」篇は漢代以降の楚辞体作品を扱うのだが、この三篇はひと連なりのものとして、楚辞の文学史を形成している。賦の起源を検討した「原賦」篇をこれに含めてもよい。このようなジャンル別の文学史というのは、明治から大正にかけての時期には珍しく、しかもほとんど戯曲・小説に限られていた^{六三}。楚辞を含む辞賦のジャンルに関していえば、鈴木虎雄の『賦史大要』が刊行されるのは、昭和十一年（一九三六）になってからである。『屈原賦説』は独立したジャンル別文学史というわけではないが、二十篇のうち三篇ないし四篇のまとまった分量をこれに充てており、その先進性は見過ごすことができない。

そして『屈原賦説』の全体は、はじめにふれたように、楚辞に関する諸問題を広く論じた、楚辞概論というべきものであった。文学概論というのは、大正時代に入って出現した新しい類型である。松本肇は、大正時代に新たな中国文学史が書かれていないことを指摘した上で、文学概論の出現が大正期の新しい動向であること、昭和の前期には小説・戯曲・詩論・賦などの多彩な分野の研究書が出現することを指摘する^{六四}。文学史の刊行が一段落してから文学概論や分野ごとの研究書が出てくるというのは、おそらく研究史上の必然であろう。新しい文学研究のためには、まずその対象を規定する必要があり、それを時系列に沿って記述することで文学史が生み出された。その後研究が進んでゆくと、発展の方向としては二つ考えられる。一つは範囲を限定してより深く掘り下げる方向で、ジャンルごとの文学史はここから生まれる。もう一つは文学に広く適用される基本原理を考えようとする方向で、文学概論はこうして出現するのである。『屈原賦説』は、楚辞という一つの分野を対象としつつ、ジャンル別文学史と文学概論の二つの要素を兼ね備えたものであり、大正時代の中国文学研究として、最も先進的な著作であったと言つてよいのである。

篇二〇・三二頁参照。

六三 笹川種郎『支那小説戯曲小史』（東華堂、明治三十年〔一八九七〕）、宮原民平『支那小説戯曲史概説』（共立社、大正十四年〔一九二五〕）など。ジャンルごとの文学史が戯曲・小説から始まったのは、これらがそれ以前には正統文学とはみなされなかったからであろう。新しい文学観が入ってきてその価値が見いだされたことによって、それを記述する必要があると思われるようになったのである。

六四 松本肇「日本で刊行された中国文学史」大正・昭和戦前篇（川合編前掲書資料篇）八五頁、および一〇四頁。

三、「屈原賦説」の「古々」——漢文で書くということ

a. 旧式教育最後の世代——古典講習科と考証学

以上『屈原賦説』の新しさについて縷々論じてきたのではあるが、一方でそれが漢文体で書かれていることについても考えておく必要がある。まず前提として、天囚が受けた教育について一瞥しておく。

天囚は明治維新の三年前、慶応元年（一八六五）に種子島で生まれた。郷里で前田豊山（一八三二—一九一三）から朱子学を学んだ後、明治十三年（一八八〇）に上京し、同じく薩摩藩出身の重野成斎（一八二七—一九一〇）と、その友人の島田篁村（一八三八—一九八）の私塾で学んだ。東京大学はすでに開学しており、和漢文学科も設置されていたが、当時の東京大学は英語で授業を行っており、和漢文学科でも東西兼修を標榜して、学生に英語を課していた。ただでさえ漢学の地位が低下していたところへ、漢学を修める者の多くは英語ができないから、和漢文学科は学生がほとんどいない状況が続き、漢学は相変わらず私塾において教授されていたのである。この状況に鑑み、明治十五年（一九八二）に東京大学に古典講習科が設置されて^{六五}国学の課程が開かれ、十六年には漢学の部門も学生募集を開始した。古典講習科は入試に英語を課さず、授業も伝統的な国学か漢学で、しかも募集定員の四割は給費制という破格の待遇であった。ここにおいて新式教育を受けていない各地の秀才が雲のごとく集まり、漢学教育の一大中心となったのである。町田三郎はこのあたりの事情にふれ、「当時東京や大阪の大都會でこそ数学塾や英語塾が存在したが、地方にそれを望むことは難しかった。語学を身につけるべきチャンスもまたなかった。地方にはこうした秀才がごろごろいたのである。種子島出身の西村天囚にせよ、松江から上京した瀧川亀太郎にせよ、事情は同じであった^{六六}。」といっている。

ところがさまざまな事情で、古典講習所はわずか二回の入試を行ったのみで、明治二十一年（一八八八）には廃止されてしまう^{六七}。同時に、十九年に東京大学から改称していた帝国大学は、関連する教学部門を拡充して、国文・国史・漢学などの専攻が設置される。このころには、新式学校教育がようやく普及し、帝国大学本科でも伝統学術に志す優秀な学生を集めることができるようになっていた^{六八}のである。こうして見てくれば、古典講習所は新旧両制度の過渡期の産物であり、天囚は旧式教育を受けた最後の世代^{六九}であることが知れよう。

同時に指摘しておかねばならないのは、古典講習所に代表される当時の伝統的学術は決して因循姑息なものではなかったということである。この時期、漢学の範囲で最も先進的な学問といえば、清朝考証学であった。重野成斎も島田篁村も、ともに考証学を自らの方法とし、古典講習所の教壇に立った^{七十}。考証学は、儒教の經典の完全なる理解を究極

六五 実際には伝統学術振興という建前だけでなく、帝国憲法体制に向けた我が国固有のイデオロギーの構築や、詔勅を頂点とする公文書作成を担う人材養成など、政治・行政の直面する課題が絡んでいたとも指摘される。品田悦一・齋藤裕史『国書』の起源—近代日本の古典構成—（新曜社、二〇一九年）参照。

六六 町田三郎「東京大学『古典講習科』の人々」、『明治の漢学者たち』（前掲）一四七頁。初出は『哲学年報』（九州大学）五一、一九九二年。

六七 ちなみに給費生だった天囚は、奨学金を打ち切られたことで古典講習科を中退している。しばらくは『屑屋の籠』などの小説を書いて糊口をしのぐが、生活が立ちゆかずに夜逃げし、関西の新聞社を経て大阪朝日に入社することになる。

六八 町田は、学制の整備にうまく乗った例として、天囚より二歳若く東京育らの服部宇之吉（一八六七—一九三九）を挙げている。

の目標とする点においては旧来の経学の限界を抱えているが、しかし所論の一つ一つに文献上の論拠を求めるその方法は、むしろ近代的学術に通じるものを備えている。篁村は大学教授として多くの学者を養成したし、成斎は明治政府の修史事業に参加し、のちにはやはり帝大教授となつて、考証史学の祖と称されるに至る。日本の漢学は、考証学の方法を媒介として、近代的学術に脱皮を遂げたのである。郷里で朱子学を学び、漢学の基礎を身につけた天囚は、東京でふれた考証学を通して、近代的な学術を受け入れる基盤を培い、晩年の『屈原賦説』に至つてそれを実践したといふことができるだろう。大量の文献を引用して一つ一つ検討するその方法は、まさに考証学のそれである。ここでは、漢文で書くことはマイナスであるどころか、むしろアドバンテージでさえあつた。

b. 楚辞学シリーズ構想——瀧川資言『史記会注考証』との比較から

もちろん、『屈原賦説』が実際に、漢文で書かれたことについては、その内容の高度な専門性と、それが書かれた大学という場を念頭におかねばならない。天囚のもう一つの学術的貢献である日本近世儒学の研究は、まず『朝日』の記事として連載され、それをのちに書物にまとめたものであつて、当然ながら文語体ではあるが和文で書かれていた。それに対し、『屈原賦説』は大学の講義に基づいて書かれたものであるから、一般の読者を考慮する必要がなく、まして中国を対象とした研究で、使つた資料もみな中国のものであるから、漢文で書くのはむしろ自然なことであつた。

天囚には、他にもいくつか楚辞に関する未刊の著作がある^{七十一}。まず本文校訂に関するものとして、『楚辞王注攷異』がある。天囚は、架蔵の寛延三年（一七五〇）刊莊（村田）允益等校『楚辞』十七卷に諸本との校異を書き込んでおり^{七十二}、それを基にまとめたものと考えられる。扉裏に「大正己未八月藁を起し、十二月業を畢ふ」というから、大正八年（一九一九）、すなわち『屈原賦説』上巻の前年に完成していったことになるが、現存するのは「離騷」「九歌」を扱つた上巻一冊のみである。次に注釈に関するものとして、『楚辞集釈』がある。同治十一年（一八七二）金陵書局重刊の明汲古閣本『楚辞』十七卷に、歴代諸家の注釈を集めた「集釈」、異説を記した「存異」、自らの考えを述べた「私案」などを書き込んだもので、これにも巻末に「大正八年五月念日（二十日）」の日付がある。さらに『楚辞纂説^{七十三}』は、古今の書籍から楚辞に関する記述を抜き出して編んだもので、楚辞資料彙編と名づけることもできる。その内容は、屈原に関する資料、屈原にまつわる作品、楚辞に言及するさまざまな文章、さらには騷・辞・賦などの文体論などを含み、『屈原賦説』の内容とよく一致する。『屈原賦説』は、このような膨大かつ周到な準備の上に執筆されたのである。

ちなみに『屈原賦説』上巻には二種の稿本があるが、うち表紙に「未定藁」とある一種には扉に「騷學三書之式」と

前掲文一四七頁。なお服部は漢文学科ではなく哲学科出身である。

六九 古典講習所は学生の年齢を二十歳以上三十歳以下としていたが、町田は、これは嚴格には運用されず、天囚は数え年十九歳で入学したことを指摘している（前掲文注6）。

七十 島田の古典講習科および帝國大学移行後の授業については、町泉寿郎「島田重礼と考証学」一講座近代日本と漢学 第四巻『漢学と学芸』、戎光祥出版、二〇二〇年、二四・四一頁に述べられている。

七十一 いずれも大阪大学懐徳堂文庫蔵。これらについては、崔・石川前掲文に解題がある。

七十二 大阪大学は、この本を『楚辞攷異』の名で収蔵する。

七十三 不分巻 四冊。『江戸・明治期日本における『楚辞』諸注釈解題』（科研費25370404「日本楚辞学の基礎的研究」報告書一九・二七頁に、筆者によ

記されており、さらに『王注楚辞攷異』には「屈子學三書之式」との注記がある。「騷学」と「屈子学」が同じなのかどうか、仮に同じであったとして「其三」が何を指すのかは不明だが、天囚には、楚辞の校訂・注釈・資料集成として概論を包括した、一連の著作シリーズの構想があったと考えられる。そしてその原稿も、大正八、九年頃には着々と整備されつつあったのだ。漢籍の校訂・注釈・資料集成は、漢文で書くのが便利であり、また自然である。今日でも、校勘記を簡潔な漢文で書くことはあるし、中国では文語体の注釈も珍しくはない。『屈原賦説』もそれらと一連のものとして構想されたのなら、それが漢文を用いるのは、むしろ必須の条件であったともいえるだろう。

ここで瀧川資言（通称亀太郎、号は君山、一八六五—一九四六）の『史記会注考証』にふれるのも回り道ではなからう。瀧川は、先に引いた町田三郎の文章で、地方の秀才の例として天囚と並称されていたが、天囚とは同年で、ともに島田篤村に学び、古典講習科でも机を並べた親友である。その後天囚は大阪で記者となり、瀧川は仙台の第二高等学校で教鞭を執るが、その交友は変わらず続いた。

瀧川は、東北帝国大学所蔵の古活字本『史記』の欄外に、唐の張守節の注釈『史記正義』の佚文が大量に書き入れられているのに気づいた。『史記正義』は、現行本では南朝宋の裴駰の『史記集解』・唐の司馬貞の『史記索隱』と合わせ収録されるが、その際に削られた部分が、日本では書き入れの形で保存されていたのである。そこで瀧川はこれらを『史記正義佚存』二巻にまとめた^{七四}が、それを直ちに刊行することはせず、日本の鈔本や前田家伝来『博士家本史記異字』所引をも含めた諸本の校勘、中井積徳・岡白駒ら日本の学者を含めた諸注釈の集成、『史記』本文の記述の基づくところの考証をも合わせた、『史記』の総合的研究書を構想する。こうして著されたのが『史記会注考証』であり、昭和七年（一九三二）から九年にかけて刊行された。瀧川が東北帝大本『史記』の『正義』佚文を見つけたのは大正二年（一九一三）だという^{七五}から、実に二十年越しの大仕事であった。日本の『史記』研究はもとより、日本漢学史上に残る、また世界に誇るに足る成果であり、今日まで、『史記』研究の最重要文献であり続けている。

『史記会注考証』には、実はもう一つ、現在ではあまり注目されない部分がある。それは、巻末に附載する『史記総論』である。その項目は、太史公事歴・太史公年譜・史記資材・史記名称・史記記事・史記体製・史記文章・史記残欠・史記附益・史記流伝・史記鈔本刊本・史記集解索隱正義・史記正義佚存・司馬貞張守節事歴・史記考証引用書目挙要というもので、司馬遷の事跡に始まり、諸本や注釈に至るまで、『史記』に関する諸問題が広く取りあげられている。注意したいのは、これがすべて漢文で一六七頁という大部なものである点だ。これだけの分量になるのは、大量の文献を用いる考証学のスタイルをとるからである。内容も単なる解題や凡例の域を超え、総論の名の通り『史記』に関する概

る解題と引用書目一覧を載せる。解題の中国語版は、日本楚辞学的基礎研究小組「日本江戸・明治時期の楚辞学」として『中国楚辞学』第二六輯（二〇一九年）に掲載されている（『楚辞纂説』については三九二—四一頁。なお本書は二〇二〇年に至って、崔小敬の点校により、『屈原賦説』等と合冊で出版された（前掲）。

七四 以上のいきさつは、『史記会注考証』附載「史記総論の『史記正義佚存』に詳し。

七五 『史記会注考証』巻末「書史記会注考証後」。

論といふべきものになっている。通常の解題や凡例と異なり巻末につけられているのも、それ自体で独立した著述となり得る量と質があるからだろう。

「史記通論」が漢文で書かれたのは、考証学のスタイルによっているためもあるが、本文批評・注釈・考証という、極めて専門性の高い文献学的著作の一部として書かれたからだろう。天囚もまた、『屈原賦説』の他に、一連の文献学的著作を構想し、原稿も準備していた。その構想がすべて実現していたなら、『史記会注考証』と並ぶような記念碑的著作となっていたのではなからうか。

天囚が京都帝大で楚辞を講じていた頃、瀧川は二高で教えつつ『史記』諸本の調査を進めていた。二人が互いの著作の構想について語り合うこともあったのだろうか^{七六}。若き日に古典講習科で身につけた考証学が、二人を同じ方向に歩ませたのだろう。

C. 支那学者漢文を学ぶべし

天囚が『屈原賦説』を漢文で書いたことには、あと一つ積極的な意味があったのではないかと思われる。天囚最晩年の論文に「修辞学の将来^{七七}」と題するものがある。この論文は、日本において口語文が盛んになり、漢文が衰えたことを憂えて書かれたのだが、実際にはむしろ中国における白話文（口語文）運動である「文学革命」に相当な注意を向けている。一九二一年の辛亥革命を承け、翌一九二二年は民国元年となるが、この年は即ち日本の大正元年でもある。民国六年（一九一七）には、雑誌『新青年』を舞台に、胡適の「文学改良芻議」と陳独秀の「文学革命論」が相次いで発表され、翌年にはその実践として魯迅が白話文で書いた「狂人日記」が同誌に掲載される。あたかも、天囚が京都帝大で楚辞と並んで『古文辞類纂』を講じ、桐城派の古文を鼓吹していた時期である。古文とは、四六駢儷文のような技巧や形式美を排し、いにしえの道に立ち返ろうとする思想性を帯びた文体である。清代には、桐城の方苞が興した桐城派が一世を風靡し、天囚もその信奉者であった。同じく桐城の姚鼐が編んだ『古文辞類纂』は、彼らが規範とする文章を集めたアンソロジーである。ちなみに、「文学革命」の陣営からも激しい攻撃に遭ったのが、まさに桐城派の古文家たちであった。

天囚はもとより古文を擁護するのだが、さりとて口語文を排撃するのでもなかった。彼の主張は、論文第七節に「各功用あり」と題するとおりである。その一節にいう。

七六 瀧川は天囚の追悼文の中で、天囚からの来信二通（大正九年八月二十七日および九月七日）を紹介するが、そこには執筆中の『屈原賦説』にふれる箇所がある。「碩園博士の初年『晩年』、『碩園先生追悼録』（懐徳）第二号、懐徳堂友会、一九二五年）六一、六二頁参照。近年、池田光子は、種子島西村家所蔵資料から、「資言」の署名のある瀧川の草稿が発見されたことを報告し、「この二つの草稿が正しく資言の手によるものであるならば、両者の関係は現在認識されているよりも、密接なものだったのではないかと予測される」と述べる。「種子島西村家所蔵西村天囚関係資料の整理状況と特徴について」、『懐徳』八七、二〇一九年、四四頁。

七七 『斯文』四、大正十一年（一九二二）二四九—二六三頁。

古文辞廃すべからず。而して婦、方、劉、姚^{七八}亦妖魔にあらず。則ち白話体廃すべきか。曰く否。白話体亦自ら功用あり。何ぞ其れ之を廃せん。……

学者は宜しく学者の文を作るべし。新聞記者は宜しく新聞記者の文を作るべし。何ぞ必ずしも一定の文体を用ひ之を他人に強ひんや。所謂国民文学、写実文学、社会文学^{七九}固より可なり。皆用処あり。世之なかるべからず。而も所謂貴族文学、古典文学、山林文学亦可なり。亦用処あり。何ぞ必ずしも推倒湮滅するを用ひんや^{八十}。

中国の「文学革命」は単なる言文一致運動ではなく、古典文を一掃することを通じて、それによって担われてきた儒教道徳の打破を指すものであった。一方、桐城派も単なる文章の流派ではない。方苞は文章の「義法」を重んじ、姚鼐はそれを義理・考拠・詞章すなわち思想・事実・表現の兼備として定式化した^{八一}が、「義理」とは朱子学のそれにほかならなかった。だから「文学革命」派と桐城派とは不倶戴天の敵た^{八二}らざるを得なかったのだが、新聞社に勤めながら学者としても活動し、社会文学——『屑屋の籠』をそうよぶならばだが——も典雅な漢詩文もよくした天囚から見れば、どちらか一方のみを取るのにはあり得ないことだった。ちなみにここでの「貴族文学」という語には、「即台閣文字」と割注がついている。台閣とは、詔勅を発する官署のことである。この頃天囚はすでに宮内省にあり、詔勅の起草も行っていたから、彼にはこの「貴族文学」の担い手たる自負があったのだろう。その点では、天囚の立場はやはり保守であるには違いない。しかし、「各功用あり」の論は、対立をうやむやにして文学の革新を抑え込もうという守旧派の姑息な手管ではなく、自らの経験に深く根ざしているのであって、その思想的意義は別途検討される必要がある。さて「学者の文」については、第八節「專家宜しく辞を修むべし」でより具体的に論じられる。

聞く泰西諸国支那学を研究する者頗る多しと。我が支那学者立言著説して以て世に問はんと欲せば、支那人泰西人を以て対手となさざるべからず。支那人泰西人をして我が書を読ましめんと欲せば、則ち漢文を用ふるに若かず。其の作る所の漢文、古文辞にあらずんば則ち恐らくは広く行はれ遠きに伝はる能はざるなり。願くは各大学支那学を修むる者をして必ず漢文を修めしめんことを^{八一}。

この論文は『屈原賦説』より後のものだから、その主張が『屈原賦説』執筆時に明確に自覚されていたかどうか厳密にはわからない。ただ、自らを「支那学者」と規定し、支那人・泰西人との交流の必要を説く点は、中国の学者と直接

七八 婦は明の婦有光。その文は桐城派の重要な規範であった。劉は清の劉大櫛。方苞の継承者。陳独秀「文学革命論」で、方・姚を含めた四人は明の古文家と合わせて「妖魔」呼ばわりされる。

七九 陳の「文学革命論」は、国民文学・写実文学・社会文学の推進と、貴族文学・古典文学・山林文学の打倒を説く。

八十 『斯文』四・四二六頁。

八一 同前、二六三頁。

交流し、ヨーロッパのシノロジーに目を向けて、旧来の漢学の枠を越えた「支那学」を築いていった京都帝大の学風と完全に一致する。天囚が京都帝大で作文の授業を担当していたことから考えても、「支那学者漢文を学ぶべし」の主張は、京都での教学経験を通じて形成されていたものと見てよいのではなからうか。中国はもとより、ヨーロッパの学者も中国文化に関心を向けつつある中、かつて東アジアのリング・フランカであった漢文に、天囚は新たな可能性を見いだしていた。そしてそれは、かつて官命を受けて高官たちと面会し、のちには留学して学者たちと交わった自らの経験をつまえたものであった。

d. 漢文は論説にあらざる

学者は漢文を学べという天囚の主張には一理ある。盟友瀧川資言の『史記会注考証』は、漢文の著作であったおかげで、刊行が完結しないうちに中国の新聞に論評が出た^{八二}という。またそれから十年を経ない一九四〇年には、魯実先『史記会注考証駁議^{八三}』が出版されている。

しかし、校訂や注釈など本文に密着した研究を別にすれば、学術論文も日本語で書くのが、天囚の当時でもすでに当たり前になっていた。天囚の少年期と異なり、中国語を学ぶ環境も整っていたから、漢文の交流ツールとしての役割は低下していた。また当の中国でも、白話文が急速に定着していった。天囚のように自由に漢文を操れる人材が少なくなくなっていったことはもちろんあるだろう。そして何より、日本の新しい学問を築くためには、やはり日本語で発信する必要があった。先にふれたとおり、明治期の中国文学史——それらはもちろん日本語で書かれている——は、主として天囚より年少の、新式教育を受けた帝国大学卒業者によって、若いうちに書かれた。彼らが切り開いた新しい文学観が、天囚にも影響を与えたことはすでに見た。しかしそのようにして学問が刷新された後では、たとえ専門性をより深めていったとしても、再び漢文を著述の言語にするというのは、もはやできない相談であったと言わざるを得ない。

中国文学史の執筆が一段落した明治末年から大正にかけての時期には、中国の重要な古典を集めた大型叢書が相次いで出されている。そのうち、講釈調の和文による解説である早稲田大学出版部の漢籍国字解全書^{八四}や、訓読文を主とした国民文庫刊行会の国訳漢文大成^{八五}は、一般への普及を目的としたものであったから、解題も当然日本語で書かれている。一方、富山房の漢文大系^{八六}は、原文と重要な注釈を校訂し訓点を附したもので、中身は純粋な漢文なのだが、解題は漢字片仮名交じりの訓読体の日本語である。ちなみに漢文大系の『楚辞』は、岡松甕谷（一八二〇—一八九五）の『楚辞考』に拠っている。岡松は明治一五年（一八八二）から一九年まで東京大学教授であったが、それは古典講習

八二 魯実先『史記会注考証駁議』巻末に附載する張仲陽の「校読識語」によれば、民国二十三年（一九三四）二月十日の『大公報』図書副刊に批評が出たという。ちなみに『史記会注考証』の刊行完結は同年六月。

八三 初版は民国二十九年（一九四〇）、湖南長沙湘芬書局というが、未見。一九八六年に岳麓書社から点校本が出た。

八四 明治四十二年（一九〇九）刊行開始。全四十五巻。まず浅見綱齋『楚辞師説』を含む近世の既存の書を刊行し、適当なものがない場合は早稲田の教授陣が新たに執筆した。

八五 大正九年（一九二〇）刊行開始。正編・続編合わせ総計八八巻。『楚辞』は正編文学部第一巻として、釈清潭が担当した。

八六 明治四十二年（一九〇九）刊行開始。全三巻。『楚辞』は第二巻に『近思録』と合わせて収められる。

科設置に伴う任用であった。校訂と解題を担当した岡田正之（一八六四―一九二七）も古典講習科の修了生。刊行は大正五年（一九一六）で、あたかも天囚が京都帝大に受講を始めた年である。漢文大系として商業出版であり、専門家だけを対象にしたものではないことを考慮してもなお、天囚や瀧川のように、解説や総論まですべて漢文で書いてしまうのは、やはり特殊な例だったのである。

『屈原賦説』が発表された『芸文』は、京都帝大文学部の教授らによる京都文学会から刊行されていたが、おもしろいことに、學術論文以外に少数ながら創作も載せている。たとえば、『屈原賦説』が掲載される直前の第一一年第五号（一九二〇年五月）には、鈴木豹軒（虎雄）の漢詩「春日雜詠十首」が掲載されている。学問と芸術とは互いに排除しあうようなものではなく、「学芸」としてともにあったのである。

こうしたあり方は、当時の他の學術雑誌にも広く見られる。天囚が執筆したものだけを見ても、『東亜研究』には「支那の国号に就いて^{八七}」という日本語の論考の他、「祭先師豊山先生文^{八八}」「木邨耕巖翁碑^{八九}」などの漢文が、「修辭学の将来」が載った『斯文』には、他に「鉄砲伝来紀功碑^{九十}」「延徳本大学跋^{九一}」などの漢文が載せられている。

ただし、同じ雑誌に載っているにもかかわらず、日本語の論文と漢詩文とはいささか扱いが違ったようだ。『斯文』ではそれが明確に現れている。「修辭学の将来」が「論説」とされているのに対し、「鉄砲伝来紀功碑」「延徳本大学跋」はともに「文苑」に入れられているのである。「鉄砲伝来紀功碑」が「文苑」に入れられるのはもつともであるが、「延徳本大学跋」は、延徳四年（一四九二）薩摩で桂菴が刊刻した『大学章句』の、現存する再刊本を影印出版する際につけられた跋文^{九二}で、その学問上の価値を述べた學術論文といふべきものである。跋文には格調が要求されるから、あえて「文苑」に入れたとみることもできるかもしれない。しかし、それなら「紀年書法弁^{九三}」はどうか。この文は、年号を下の方に書いたり小さく書いたりしてはいけないういう日下勺水の意見に、さまざまな歴史上の実例を挙げて反論したもので、いよいよ純粹な考証である。それでもなお、『斯文』はこれを「文苑」に収めている。日本語（実際には漢文訓読調の仮名交じり文も多かったが）で書かれたものだけが「論説」で、漢詩文は内容にかかわらず「文苑」に入るのである。『屈原賦説』上巻が『芸文』に掲載される際には、「原漢文」と断った上で書き下し文に改められた。あるいは『芸文』においても、論文として載せるからには書き下し文にする必要があると考えられていたのだろうか。

『屈原賦説』上巻は、はじめにふれたように、天囚の没後に他の漢詩文と合わせ、『碩園先生遺集』としてまとめられる。そこでは、『屈原賦説』や「延徳本大学跋」「紀年書法弁」のような學術的文章も、「鉄砲伝来紀功碑」「木邨耕巖翁碑」のような人を顕彰する美文も、「祭先師豊山先生文」のような個人的交わりを反映した文も、さらには張之洞と会

八七 『東亜研究』三、三、大正二年（一九一〇）。

八八 同誌二、一、大正二年。

八九 同誌四、二、大正三年（一九一四）。

九十 『斯文』三、四、大正十年（一九二一）。

九一 同誌六、六、大正十三年（一九二四）。

九二 末尾に「大正癸亥六月」の日付があり、實際の執筆は大正一二年（一九二二）である。ちなみに本書の影印出版が、天囚にとつて最後の學術的業績となった。

九三 『斯文』五、五、大正一二年（一九二二）。

見した折の「張制軍と時事を論ずる書」も、折々の感情を歌った漢詩も、内容にかかわらず、古典中国語という語種によつて統合される。それは全く不思議なことではない。中国の、そして漢文世界の個人文集というのは、そうしたものであった。

ただ『屈原賦説』について言えば、こうして文集に入ったことで一つ重大な変化が起きた。原稿に朱筆でつけられていた句点が、すべて取り払われたのである。断句がされているものをわざわざ消し去るのは、実用的観点からはどうにも解せないことである。しかし漢詩文集として見るなら、句点をつけるとはなんと無粋なことになるだろう。天囚没後十二年を経て、『屈原賦説』はきれいな白文に仕立て直されて、文集の一卷に収まったのである。かくして文集は永遠に残ったが、論文としては埋葬されてしまったと言えなくもない。

四、天囚にとつての楚辞

a. 道を顕彰した後半生

本稿は西村天囚の『屈原賦説』について、当時の学術的環境に照らしつつ、その内容の新しさを、それが漢文で書かれたことの意味を探ってきた。最後に、天囚の個人史との関わりから、この著作の意味を考えてみたい。

初期の小説はひとまず措くとして、新聞記者になってからの天囚の仕事を眺めると、人を顕彰するものが次第に増えてゆくことに気づく。シベリア単独横断を成し遂げた福島中佐へのインタビューをまとめた『単騎遠征録』も、その偉業を顕彰しようとするものだし、種子島家の爵位獲得運動として書かれた『南島偉功伝』はそれがより鮮明である。数多く残された紀行文も、はじめは文字通り旅のあれこれを綴っていたのが、ある時期からその土地の人物を顕彰する、あるいは顕彰すべき人物について知るために旅に出るといった方向に変わってゆく。こうした取り組みが、九州の儒者を取りあげた『九州巡礼』、さらには『日本宋学史』や『懷徳堂考』、そして懷徳堂の再興へとつながってゆくのである。『日本宋学史』にしても、題目から想像されるような教科書的な記述では全くない。その「緒言」では、「如竹^{九四}が子の隣島に出でし」こと、「文之^{九五}が子の祖先を顕彰せし」こと、「桂菴^{九六}が薩摩文学の祖」であることにふれ、「以て一には三先生の功績を發揮し、一には教化の万一に資するは子の責任にあらざるか^{九七}」とまで言う。ここで町田三郎の評価を聞こう。

九四 泊如竹（一五七〇、一六五五）、曾号は日章。文之玄昌に朱子学を学んだ。屋久島出身。

九五 文之玄昌（一五五五、一六二〇）、島津藩の学僧。日本への鉄砲伝来について記した「鉄砲記」において、漂着船の船員に應對した西村織部丞時貫に言及する。時貫は天囚の十三世の祖にあたる。

九六 桂庵玄樹（一四二七、一五〇八）、桂菴とも書く。明に渡つて朱子学を学び、島津氏に招かれ、薩南学派の祖となった。

九七 『日本宋学史』（杉本梁江堂、一九〇九年）緒言、四頁。

元来天囚の作品にはお国自慢が強い。「南島偉功伝」などその尤なるものといえよう。客観的な学問を目指すにはこれでは困る。天囚の「緒言」はたしかに歴史の中で自己を凝視し、歴史を明らかにしてゆく過程で自らをもそこに位置づけていくという真摯さと情熱をも感じさせるものであるが、一面では天囚の郷土愛が客観性や判断の公正さにかえって影をさしはしないかとの危惧を抱かせる。しかし実際に完成した『日本宋学史』をみると、記述の順序構成から、後半部に薩摩色が濃厚であることは事実だが、対象である宋学そのものが本来種子薩摩といった地域を超えた普遍的なものであるゆえにお国自慢のレベルに墜ちることはなかった九八。

天囚が力を入れて研究したのは、郷里種子島を含む九州と、長年住んだ大阪で活動した人々であった。なるほどたしかに、お国自慢に陥る危険を免れない。しかし、全く思い入れのない対象を研究することなどできるだろうか。むしろ、はじめ自分だけのものではなかった思い入れを、独りよがり陥らぬように検証し、他者と共有できるものへと開いてゆくの、研究という営みではなからうか。そしてそのための強力なツールとして、天囚は重野成斎から考証学を授かっていた。天囚は、若い頃は奔放だったのに、中年以降突如考証に沈潜するようになるとも言われるが、それにはそれだけの理由があったのだ。

b. 道を語る言葉——桐城派と屈原

しかし一方で、若き天囚が考証よりも詞章にひかれていたのは、天囚を京都帝大に招いた狩野直喜（一八六八、一九四七）も証言している。「矢張詞章の方面が非常に好きであつて考証と云ふやうなことは嫌ひでありました九九。」さればこそ、一度は流行作家となることもできたのだろう。天囚が屈原に熱中したのも、あるいはこの詞章への偏愛とかわるのだろうか。

周建忠は、天囚が懷徳堂で楚辞を講じていないことから、彼の楚辞研究は晩年の個人的行為であり、京大での授業の必要から生じたものとしている^百。確かに、天囚の楚辞に関する著述は、京都での講義に関連して書かれたものであるが、『楚辞』の諸本や注釈の蒐集は、それ以前から始まっていたはずである。また狩野によれば、彼に依頼したのは「特別講義」と作詩作文、ならびに『古文辞類纂』であったという^百。狩野の意図としては、桐城派流の名文家であった天囚に、桐城派を代表するアンソロジーである『古文辞類纂』の講義と作詩作文の指導を依頼し、その代わりあとの一

九八 町田「天囚西村時彦覚書」(注一前掲)、一七二、一七三頁。

九九 狩野直喜「追悼談」、『頼園先生追悼録』(前掲)四九頁。

百 周建忠「大阪大学蔵楚辞百種考論——関于西村時彦・読騷廬・懷徳堂」『職大季報』二〇〇八、一、二二頁。

百一 狩野、前掲文、五〇頁「大正五年の九月から特別講義と、作詩、作文と古文辞類纂と云ふやうなものを三時間ばかり教へて貰ひました。」ただし橋本備の回想によれば、特殊講義の題目は「漢文総説」や「辞章論略」であり、楚辞は挙げられていない。「西村天囚先生のことども」『橋本備著作集』四「法蔵館、二〇一九」四九一、四九三頁。初出は『懷徳』三七、一九六六。あるいはすべての年度に楚辞を講じたわけではないのだろう。

時間は、得意とするところを自由に語ってもらえばよいと考えていたのではなからうか。ならば、天囚が楚辞を講じたことには、かねてから思うところがあったのではないか。

そもそも桐城派自体が、楚辞を相当重視していた。『古文辞類纂』は、文の選集であるにもかかわらず韻文に属する「辞賦類」を設けるが、その先頭には屈原・宋玉の作品が並んでいるのである。また「哀祭類」も、屈原の「九歌」と宋玉の「招魂」で始められている。つまり楚辞は、桐城派にとって、理想の文の源となる必読の作品群であった。『屈原賦説』において楚辞の句法を詳しく論じるにも、おのずと力が入ろうというものである。

屈原は別に天囚の同郷でも縁者でもないから、『屈原賦説』ではそれまでの著作にもまして考証学の手法が前面に出てくる。しかし、『屈原賦説』は決して冷たい考証だけの書物ではない。屈原に対する尊崇の念は当然ある。すると、郷里で受けた朱子の教えが顔を出してしまうのだ。「道術」篇で屈原と孟子との関係を強調するのは、そのためではないかと思われる。屈原の作とされるものに、儒家的な言辞が垣間見えるのは確かだが、むしろ『莊子』をはじめ道家との近しさを言うのが普通だろう。韓愈に「莊騷」連称の例^{百二}があり、金聖嘆「六才子書」のはじめの二つも『莊子』と「離騷」である。古典講習科の同学であった岡田正之は「其ノ思想ハ、七分ノ儒教主義ト三分ノ道家主義トヲ以テ混成セラレ^{百三}」と儒家寄りの見方を示すが、天囚は「三分ノ道家主義」さえ見ようとしなない。もつとも、理想を掲げ妥協せず突き進むところは、案外似ていなくもない。天囚としては、詞章の人屈原が、孟子と同じように理想の道掲げていることを示したかったのだろう。一方、孟子の書は、儒家の中では詞章の豊かなものであり、古来古文の規範とされたのも故あることである。義理・考拠・詞章の兼備を目指す桐城派の天囚としては、屈原と孟子を実証的に結びつけるのは、決して突飛でないどころか、むしろ当然の義務と考えていたに違いない。

屈原は、最晩年の朱子が精力を傾けて研究した対象であった。儒家の經典でもない『楚辞』に朱熹が敢えて注したことは、しばしば朱熹晩年の不遇と結びつけられるが、天囚がそこに何かを感じていたかどうかはわからない。しかしともあれ、天囚もまた朱熹と同じように、人生の仕上げの時期に楚辞と深く向き合うことになった。高い理想を高い調べで歌った屈原について考証することは、道に生きた先人について考証する文章を書き連ねた自らの後半生の、総仕上げでもあつたらうか。

百二 韓愈「進学解」に「下は莊・騷、太史の録する所子雲・相如に逮ぶまで、同工異曲なり。」

百三 岡田正之校訂「楚辞」解題（富山房「漢文大系」第二冊、一九一六年八月）。

おわりに

『屈原賦説』は、単に楚辞の概説書である以上に、はじめ郷里で朱子学を学んだ天囚が、考証学という新しい道具を手に入れ、近代の大学という場で、新しい時代の学術動向と切り結んでいったことの記録である。一方でその底には、朱子の教えと、それに根ざした桐城派の文章哲学が横たわっているようだ。古いものと新しいもの、変わるものと変わらぬものが、どちらも強固に存在しつつ不思議なバランスを保っている。それは、漢学、なかんづく朱子学という伝統的な学問を身につけた人間が、近代化に突き進む明治大正期の状況に真摯に対応しつつ繰り広げた知的営為を、如実に反映しているのである。

天囚という人は、新聞社ではいわゆる進歩派ジャーナリストと必ずしも関係がよくなかったし、中年以降は儒学の顕彰に努め、晩年には皇室にもかかわったから、表面だけ見ると、近代化する日本に背を向けて逆コースに邁進したようにも見える。しかし、『屈原賦説』のような純学術的著作を見ても、決してそんなに単純なものではないことがわかる。天囚について、この時期の学問について、考えるべきことはまだ多く残されているようだ。

〔附記一〕本稿はもと中国屈原学会での発表に向けて準備された。論文は二〇二一年に提出したが、学会は感染症の影響で再三延期され、開催のめどは立っていない。本稿はその提出論文に大幅に加筆修正したものである。

〔附記二〕本稿は科研費19K00377（研究代表者：宮崎公立大学 田宮昌子）の成果である。